

食虫植物研究会の歴史と現状について

田 中 桃 三

食虫植物研究会は、1949年秋、有志により計画され、翌50年1月に発足した。当初は会員40名、会長は日本歯科大学教授の豊田実氏であった。名簿の中には千葉大学の教官であった久保田美夫さんの名もみえる。会員は主に高校や中学の先生と大学生、高校生。同年12月には60余名にふえ、その中に岩佐吉純さん、武田和男さんなどの名前をみることができる。

現在のところ会員数は400人台を推移しているが、入会金は1000円、年会費は4500円で、年齢別や専門業者などで差はなく、会員としては平等である。

会長1名、副会長2名、他に役員が10名ほどおり、それぞれ、会報、企画、庶務などを担当している。会長は創立の時の主要なメンバーで、食虫植物で学位を取得された、小宮定志である。

会の活動は、集会（講演、種苗の配布、交換など）、会誌の発行、自生地見学会（当初は採集会と称していた）などが主な行事で、これは現在まで連綿として続いている。その内容を紹介したい。

集会

種苗の配布、交換は、市場性に乏しく、入手しにくい種類が多い食虫植物を配布することにより、会員の

増強に力があつた。初期のころは外国産の種類はなかなか入手できなかったが、戦前より一部の熱心な栽培家のもとに残されていた種類を増殖して配布した。その後は外国の業者や同好の士と連絡をとり、入手できるようになったが、現在でも入手困難な種類も多い。

また栽培したものを交換したり、見せ合うことは栽培者にとって励みにもなり、栽培技術の進歩にもつながるものとなる。これは大切なことで、ムジナモの存続を例に紹介したい。

ムジナモは水中に浮遊する食虫植物である。牧野富太郎氏が江戸川河川敷において日本で最初に発見し、その花を記載したが、これが彼を世界的な植物学者にしたことで有名である。戦前は日本各地にあつたムジナモも、開発と水質の悪化により1955年ごろには埼玉県の一部にだけに自生し、天然記念物に指定された。しかし58年台風の増水によりすべて流され、絶滅してしまったのである。しかし幸いにも、本研究会員や水草の栽培家により保持されており、栽培技術も確立していたので、埼玉県羽生市の方々と協力して増殖し、元のところに放流することができた。

また、会では年に数回、室内で会合をもつ。もちろんなかには総会とか新年会として開くものがあるが、



自生地見学菊川にて

いずれにしても卓上展示会と銘うって各自が持ち寄った栽培品を見せあい、栽培法を披露し、質疑応答が行われる。これにはだれでも参加でき、栽培暦十数年のベテランから入会したての小中学生も同様に扱う。

そして自家で増殖した種苗などを無料で、あるいは安く販売したり、交換したりする。これはなかなか貴重な種類が含まれることも多く、好評である。

会誌の発行

会誌については1950年1月30日に創刊号を発行し、以来現在200号を発刊したところである。大体年4回の発行であるが、現在はA4版32~40ページ。表紙、裏表紙のほか2~4ページのカラー写真のページがある。内容は自生地見学の紀行文から品種の紹介、栽培、繁殖方法、保護活動の報告、学術的な論文にいたるまで多岐にわたっており、世界的にも高い評価を受けている。

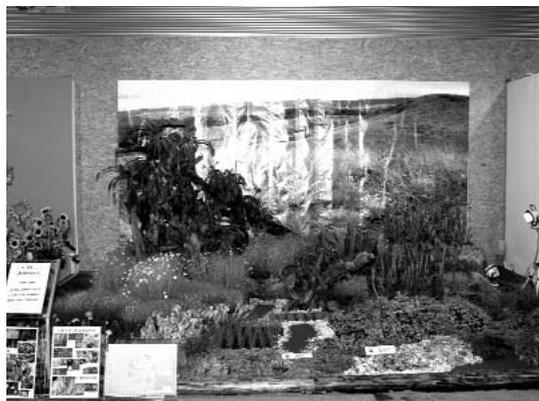
自生地見学会

各地の自生地を訪れて調査する自生地見学会は、初期のころは千葉県茂原や成東などの著名な自生地でも年々のように行われていた。最近でも静岡県菊川、掛川などや日光連山の庚申山などには1年おきに行き、生育状況を調べている。あるいは各地の保護区などでそれぞれ保護に携わっているボランティアの方々と情報交換のための見学会を行っているが、年2~4回、参加者は7~12人ほどである。

1990年代半ばより、年1度ぐらい海外の調査にも出かけている。もちろんそれ以前にも会員個人レベルでは世界中の状況について調べ、会報などで報告されているが、1990年のサハリン探査を初めとして、会の事業として行っている。サハリンでは戦前に報告されながら50年以上にわたって詳細が不明であったムシトリスミレの1種について、その分布や系統上の位置などについての貴重なデータを得ることができた。

このほか、ブラジル中央部では比較的新しく食虫植物とされたホシグサ科の1種で、この地の特産種を探しに行き、その植物の生態を調べることができた。

2000年、食虫植物の図鑑を出版することになった。いままでの会の活動の集大成として、なるべく多くの種類の原種の自生状態の写真を掲載することになり、オーストラリア、アラスカ、ギアナ高地、南アフリカ、東南アジアなど、世界各地を旅することになった。



花博での食虫植物展示

食虫植物の普及

展示会を開くが、これは会独自に開くこともあり、植物園の企画展示や博覧会などへの参加の場合もある。会独自の展示会は、主に夏季、都内のデパートの園芸売り場の1画を借りて行ってきたが、最近では売り場の改築などで開催できなくなってきた。しかし企画展は要望も多く、今年は会として協力しているものに東京の「夢の島植物園」ほか2箇所ある。展示内容は主催者側の要望もあり、実物展示を主体とするか、写真展示を主にするかなど違いがある。

会ではとくに希少植物の保護についての活動もある。先ほどのムジナモの例でもその保全に重要な役割をしているが、日本の特産種であるコウシンソウの保護についても、その生育環境の推移についての調査など50年以上にわたり記録している。またミミカキグサ類やタネキモ類、モウセンゴケ類は湿地の植物である。水質の汚染などに敏感に反応するので、湿地の環境変化の指標植物として注目されており、各地湿原の管理者などと連携して保護活動に協力している。

出版活動としては、会として1979年『食虫植物不思議な魅力』を出版、96年『花アルバム食虫植物』、03年『世界の食虫植物』を出版し、食虫植物に関する知識の普及につとめてきた。

最後に会の問題点としては、最近、若い会員が減少していることである。これは他の同好会でも同様な傾向があるのだが、理科離れなどといわれているように社会の風潮としてやむを得ない面もある。だが会としてもホームページの充実など、食虫植物の正しい知識の普及と、環境や自然保護の大切さを伝えていきたいと考えている。